九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓国語の語彙的複合動詞

和田, 学
山口大学

https://doi.org/10.15017/24488

出版情報：九州大学言語学論集. 32, pp.249-266, 2011. Department of Linguistics, Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

韓国語の語彙的複合動詞

和田学
(山口大学)
wadagaku@yamaguchi-u.ac.jp

キーワード：韓国語、複合動詞、語彙的緊密性

１．はじめに

韓国語には、様々なタイプの複合動詞が存在する。本稿では、第一の動詞(V1)が V-e 形を取るものの内、V2 が助動詞的機能を持たないもの(SVC)を中心に論じる。SVC は語彙部門で形成されるとする立場と統語部門で形成されるとする立場があるが、本稿では、前者を支持する論拠をでき得る限り網羅的に挙げる。一方で、SVC の構成素が統語的に独立していることを示す事実があり、後者の立場を支持する様に見えるが、本稿では V1 の活用形に着目して、語彙部門で形成された複合語の構成素が統語的な独立性を取り得ることを主張する。

２．韓国語の複合動詞

韓国語の複合動詞にはいくつかの分類が可能である。形態的には複合動詞の第一要素(V1)が語幹の形式を取るものと、V-e 形を取るものに分類できる。更に、V-e 形を取る複合動詞の内、統語部門で形成されることが広く受け入れられているタイプと、語彙部門で形成されるとする主張と統語部門で形成されるとする主張が対立しているタイプが存在する。以下では、それぞれのタイプについて、概観する。

２．１．語幹複合動詞：語彙的複合動詞

複合動詞の内、V1 が語幹の形式を取るものを本稿では語幹複合動詞と呼ぶ。

(1) a. cilu-titi-ta (突く(語幹)+踏む=つまさき立ちで立つ)
b. olu-nayli-ta (上がる(語幹)+降りる=上がったり下がったりする)

語幹複合動詞はあらゆる特徴に関して、語彙部門で形成される、もしくは語彙部門に登録されていることが明白である。第一に、김창섭(1981; 62)

が指摘した様に、語幹複合動詞の中には意味的な特異性を示すものがある。

(2) a. ttwi-nol-ta　　b. ttwi-ko nol-ta
飛ぶ(語幹) 遊ぶ　　飛ぶ-Comp 遊ぶ
'遊び回る'　　'飛び跳ねて遊ぶ'

並列や付帯状況を表す補文標識を含む(2b)は統語的に構成される動詞連続であるが、動詞連続全体の意味は構成素をなす動詞の意味から構成的に導けるのに対し、V1 が語幹形式を取る(2a)には「飛ぶ」という意味が含まれず、全体で「遊びまわる」と言う意味になる。この様な意味的な特異性は語彙部門で形成される語に見られる特徴である。[1]

第二に、語幹複合動詞の生産性の低さもまた、これらが語彙部門に登録された固定した形式であることを示す(김창섭(1981; 61))。

これらに加えていわゆる語彙的緊密性に関する諸現象に関しても、語幹複合動詞が語彙部門で形成されるとする主張とは矛盾しない。語彙的緊密性とは、語の一部に統語規則を適用したり、語の内部に統語的要素を挿入することを禁じる原則であるが、一般的に語彙部門で形成された語は語彙的緊密性に従うとされている。[2]

まず、語幹複合動詞の一部に移動などの統語規則を適用することはできない。

(3) a. ay-tul-i kyeytan-ul olu-nali-ess-ta.
子供-Pl-Nom 階段-Acc 上がる(語幹) 降りる-Past-Dec
'子供たちが階段を上がったり下りたりした'

b. * kyeytan-ul olu- ay-tul-i nali-ess-ta.
階段-Acc 上がる(語幹) 子供-Pl-Nom 降りる-Past-Dec

第二に、語幹複合動詞の一部を代用表現に置き換えることはできない。

(4) ay-tul-i kyeytan-ul olu-nali-ess-ta.
子供-Pl-Nom 階段-Acc 上がる(語幹) 降りる-Past-Dec
'子供たちが階段を上がったり下りたりした'
*elun-tul-to kyeytan-ul olu-/*kule nayli-ess-ta.
大人-Pl-Nom 階段-Acc 上がる(語幹)/そうする(語幹) 降りる-Past-Dec
'大人たちも階段を上がったり下りたりした'

第三に、語幹複合動詞を限定詞(とりたて詞)などで分割することはでき

[1] 同様の観察は T.-G. Chung(1993; 45)、S.-Y. Kang(1993)、E.-Y. Yi(1995)などにも見られる。

[2] 影山(1993; Ch 3)では統語部門で形成される語についても形態的緊密性(の一部)に従うとされている。

ない(이충규(2009))。

(5) ay-tul-i kyeytan-ul olu-(*to/*nun) nayli-ess-ta.
子供-Pl-Nom 階段-Acc 上がる(語幹)-モ/ハ 降りる-Past-Dec
'子供たちが階段を上がったり下りたりも/はした'

最後に、語幹複合動詞は述語分裂に関しても語彙的緊密性を示す。韓国語には述語を反復する構文があり、述語分裂(Predicate Cleft)と呼ばれている。

(6) ppang-ul mek-ki-nun mek-ess-ciman,
パン-Acc 食べる-Noml-Cont 食べる-Past-が
'パンを食べたことは食べたが'

語幹複合動詞に述語分裂を適用した場合、複合語全体を反復しなければならず、V2 のみの反復は許されない。

(7) a. ay-tul-i kyeytan-ul olu-nayli-ki-nun olu-nayli-ess-ciman,
子供-Pl-Nom 階段-Acc 上がる(語幹) 降りる-Noml-Cont 上がる(語幹) 降りる-Past-Dec-が
'子供たちが階段を上がったり下りたりはしたが'

b. ay-tul-i kyeytan-ul olu-nayli-ki-nun nayli-ess-ciman,
子供-Pl-Nom 階段-Acc 上がる(語幹) 降りる-Noml-Cont 降りる-Past-Dec-が

以上の点から、語幹複合動詞が語彙部門で形成されていることは明らかである。

２．２．SVC：語彙部門か統語部門か？

V1 が V-e 形を取る複合動詞は V2 の機能により、二つに分類される。一つは V2 の位置に限られた動詞が現れ、アスペクトなどの助動詞的な役割を果たすタイプ(A(uxiliary) V(erb) C(onstruction))と V2 が助動詞的な機能を果たさないタイプ(S(erial) V(erb) C(onstruction))である。前者については、後述する様に、統語部門で形成されることが明らかであるが、後者の SVC については、語彙部門で形成されるとする立場と、統語部門で形成されるとする立場がある。本稿では、SVC が語彙部門で形成されるとする立場を支持する。

SVC の多くは、構成素となる動詞の意味から SVC 全体の意味が予測できる(8)の様な意味的に透明なものに加え、意味的に不透明なものも多く存在する。[3]

[3] 김기혁(1993; 218)を参照。

(8) koki-lul kkwuw-e mek-ess-ta.
肉-Acc 焼く-E 食べる-Past-Dec
‘肉を焼いて食べた’

意味的に不透明なものにはV1とV2の意味からSVC全体の意味が導けないものと、構成素に無意味形態素が含まれる例がある。

(9) a. kenmwul-i nayli-e anc-ass-ta.
建物-Nom 降りる-E 座る-Past-Dec
‘建物が崩れ落ちた’

b. *kenmwul-i nayli-ess-ta.
建物-Nom 降りる- -Past-Dec

a. *kenmwul-i anc-ass-ta.
建物-Nom 座る-Past-Dec

(10) a. thay-e na-ta
??-E 出る
‘生まれる’

b. tun-a tul-ta
??-E 入る
‘出入りする’

統語部門で形成される単位の意味が構成的に導かれるのに対し、語彙部門で形成される単位には不規則性、不透明性が許されるという一般的な仮定に基づくと、SVC が意味的な不透明性を示すことは、SVC が語彙部門で形成されることを支持する。

SVCが語彙部門で形成されるとすると、語彙部門でしか適用しない規則の適用対象となることが予測される。J. Yoon (1991; 216)は、韓国語の名詞化には統語部門で適用するものと、語彙部門で適用するものがあるとしているが、後者の名詞化がSVCに適用することは、SVCが語彙部門で形成されることを支持する。[4]

(11) a. cwulki-e chac-ki
楽しむ-E 探す-Noml
‘(ブラウザの)お気に入り’

b. nayli-e pat-ki
下す-E 受ける-Noml
‘ダウンロード’

c. tun-a tul-m
??-E 入る-Noml
‘出入り’

後述する様に、AVCが統語部門で形成されることについては、多くの研

[4] 이정훈(2006)も同様の見解を取っている。

究者の見解が一致している。Y. Choi (2008)は、AVC が SVC の内部に現れないことを指摘し、SVC が統語部門に先立って語彙部門で形成されていることを支持する事実として挙げている（下線部が AVC、斜字体は SVC)。

(12) a. cwul-ul *cap-a tangki-e* cwu-ess-ta
ロープ-Acc 持つ-E 引く-E やる-Past-Dec
'ロープを引っ張ってやった'

b. *cwul-ul *cap-a* cwu-e *tangki*-ess-ta.
ロープ-Acc 持つ-E やる-E 引く-Past-Dec

以上の事実は、SVC が語彙部門で形成されることを支持するが、更に、形態的緊密性に帰せられる多くの現象についても、この主張は矛盾しない。まず、第一に、SVC の内部に他の語などを介在させることはできない。

(13) a. atul-i tutie thay-e na-ss-ta.
息子-Nom とうとう ??-E 出る-Past-Dec
'息子がとうとう生まれた'

b. *atul-i thay-e tutie na-ss-ta.
息子-Nom ??-E とうとう 出る-Past-Dec

第二に SVC の一部を代用表現で置き換えることはできない。

(14) kangaci-ka thay-e na-ss-ta. koyangi-to thay-e/*kulay na-ss-ta.
子犬-Nom ??-E 出る-Past-Dec 猫-also ??-E/そうする-E 出る-Past-Dec
'子犬が産まれた。猫も生まれた'

また、AVC は統語部門で形成されることは研究者の間で一致を見ているが、김영희(1993)が指摘する様に、AVC では V1 の代用表現への置き換えが可能であり、もし SVC も統語部門で形成されるとするならば、(14)も同様に適格になることが予測されてしまう。[5]

これらの事実は、SVC が語彙部門で形成されることを強く支持しているが、更に、統語部門説では説明できないが、語彙部門では容易に説明できる現象がある。

統語部門説の中でも様々な統語構造が提唱されているが、本稿では、T.-G. Chung (1993; 14)が提案した次の構造を例にして議論を進める。[6]

(15) $[_{V0}\ [_{V0}$ V1-e$]\ [_{V0}$ V2$]]$

問題となる現象は否定辞 an の分布の問題である。否定辞 an は述語の直

[5]이정훈(2006)、Y. Choi(2008)でも同様の指摘がある。

[6] 他の統語構造を仮定しても、統語構造説を取る限り、同じ問題が生じる。

前に現れるが、SVC と an が共起する場合、SVC 全体の直前、即ち V1 の直前にしか現れず、V2 の前に現れることはない。

(16) a. Chelswu-ka koki-lul an kwuw-e mek-ess-ta.
チョルス-Nom 肉-Acc Neg 焼く-E 食べる-Past-Dec
'チョルスが肉を焼いて食べなかった'

b. *Chelswu-ka koki-lul kwuw-e an mek-ess-ta.
チョルス-Nom 肉-Acc 焼く-E Neg 食べる-Past-Dec

否定辞 an が述語の直前にしか現れないことから、語彙部門における接頭辞であるとする説もあるが、Cho and Sells(1994)、Sells (1995)は形態音韻論的な事実に基づいて、an は独立した語であり、統語部門で述語と結合するとしており、本稿でもそれに従う。

もし、SVC が統語部門で形成され、例えば(15)の様な構造を取るとしたならば、否定辞が V2 の直前に現れ、(17)の様な構造を取ることが予測される。[7]

(17) $[_{V0}\ [_{V0}\ V1\text{-}e]\ an\ [_{V0}\ V2]]$

しかし、(16b)に見る通り、この分布は許されず、SVC 全体の直前に現れる形式のみが可能である。T.-G. Chung(1993; 96)では、なぜ否定辞 an が(16b)の位置に現れ得ないかは明らかではないとしているが、SVC が語彙部門で形成されるとする立場では、容易に説明できる。

先に触れたように否定辞 an と述語の結合が統語部門で起こるとすると、また、語彙部門説に基づくと、語彙部門で形成された語の内部に統語的な語が介入することは語彙的緊密性によって(13)と同じ理由で排除することができる。

以上の様に、SVC が語彙部門で形成されることを支持する事実は多くあるのに対し、統語部門説に立つ研究者はどのような根拠に基づいて、統語部門説を主張しているのであろうか。統語部門説を代表する T.-G. Chung(1993)に従う。まず、SVC 形成の生産性がある。複数の動詞を含む SVC が可能であり、統語部門説は高い生産性と矛盾しない。

(18) saca-ka sasum-ul cap-a mwul-e ttut-e mek-ess-ta.
ライオン-Nom 鹿-Acc 捉える-E 噛む-E ちぎる-食べる

---

[7] 動作性名詞+ha-ta(「する」)は多くの研究者が統語部門で形成されるとしている。この形式の an による否定形では後部要素 ha-ta の直前に an が現れる。

i) yenkwu an ha-ta (*an yenkwu ha-ta)
研究 Neg する Neg 研究 する

SVC が統語部門で形成されるとすると、これと同じ分布が許されるという誤った予測を説明できない。

-Past-Dec

‘ライオンが鹿を捕まえ/噛み/ちぎり/食べた’

しかし、T.-G. Chung(1993; Note 16)で認めている様に、生産性が高いということが即ち、語彙部門の操作ではないということを保証するものではない。

統語部門説にとって最も重要な事実は、V1 と V2 が統語的に独立していることを示す、次の二つの事実である。

第一に、V1 と V2 の間に限定詞と呼ばれる助詞が挿入できるという点である。

(19) a. kenmwul-i nayli-e-nun anc-ass-ciman,
建物-Nom 降りる-E-Cont 座る-Past-が
‘建物が崩れ落ちはしたが’

b. Chelswu-nun thay-e-nun na-ss-ciman,
チョルス-Top ??-E-Cont 出る-Past-が
'チョルスは生まれはしたが’

第二に、述語分裂において、V1 と V2 を切り離して V2 のみを反復させることができるという点である。

(20) thay-e na-ki-nun na-ss-ciman, (浅尾(2009))
??-E 出る-Noml-Cont 出る-が
'生まれたことは生まれたが’

これらの事実は、SVC の構成素が統語的にある程度の独立性を持つことを示しており、T.-G. Chung(1993; 88)はこれらの事実に基づいて、SVC が統語部門で形成されると主張している。[8]

これらの事実は、語彙部門説にとっては大きな問題となる。(5)や(6)で見たように、明らかに語彙部門で形成される語幹複合動詞が語彙的に緊密であることから、SVC が語彙部門で形成されるとすると、同じ事実が観測されることが予測されるためである。この問題に対する解決案を 3 節で提案する。

２．３．AVC：統語的な複合動詞

AVC は SVC と同様に、V1-e V2 という形式を取るが、V2 の位置に限られた動詞しか現れず、アスペクトなどの助動詞的機能を果たすという点で SVC とは異なっている。AVC が統語部門で形成されるということは多く

[8] 同様の議論は E.-Y. Yi (1995)、Y. Lee(2002)にも見られる。

の研究者の間で一致している。[9]以下に、AVC の特徴を概観して行く。

第一に AVC では意味的な矛盾がない限りにおいて、V1 と V2 の組み合わせは完全に生産的である。第二に、AVC 全体の意味は V1 と V2 の意味から構成的に導き出すことができる。以上の二点は、AVC が統語部門で形成されるとする主張と整合的である。また、語彙的な名詞化も原則的に許されない。筆者が知る限りでは語彙的な名詞化を受けた AVC は ill-e twu-ki(言う-E おく-Noml :「凡例」)のみであり、AVC が統語部門で形成されるとする主張と整合的である。

また、先にも触れたが、AVC では V1 の代用表現への置き換えが可能であることも、上記の主張を支持する。

(21) Ywuseni-ka wuywu-lul masi-e peli-ess-ta. 김기혁(1995; 224)
ユソニ-Nom 牛乳-Acc 飲む-E しまう-Past-Dec
Namho-to wuywu-lul kulay peli-ess-ta.
ナムホ-also 牛乳-Acc そうする-E しまう-Past-Dec
'ユソニが牛乳を飲んでしまった。ナムホも牛乳をそうしてしまった'

一方、AVC は SVC と緊密性と、構成素の独立性等に関して、同じ振る舞いを示す。

まず、AVC では V1 と V2 の間に、他の語を挿入することはできない。これは、二つの構成素が緊密に結びついていることを示す。

(22) *Yenghi-lul tow-a ppalli cwu-ela. 김기혁(1996,281)
ヨンヒ-Acc 助ける-E 早く やる-Imp
'ヨンヒを早く助けてやれ。'

SVC と同様、AVC においても、限定詞(とりたて詞)を V1 と V2 の後ろに挿入することができる。

(23) John-i Mary-lul mann-a-nun po-ass-ciman, K.-Y. Choi (1991, 43)
ジョン-Nom マリー-Acc 会う-E-Cont 見る-Past-although
'ジョンがマリーに会っては見たが、'

また、AVC に述語分裂を適用すると、V2 のみを反復することができるという点でも SVC と AVC は類似している。

(24) a. John-i ku chayk-ul ilk-e po-ass-ta. T.-G.Chung(1993, 136)
ジョン-Nom その本-Acc 読む-E 見る-Past-Dec

[9] K.-Y. Choi(1991)、김영희(1993)、 김기혁(1995, 215)、 Sells(1999)等。

‘ジョンがその本を読んで見た。’

b. (?)John-i ku chayk-ul ilk-e po-ki-nun po-ass-ta.
ジョン-Nom その本-Acc 読む-E 見る-Noml-Cont 見る-Past-Dec
‘ジョンがその本を読んで見たことは見た。’

更に、音韻的にも SVC と AVC には共通点がある。動詞の中には V-e 形が 1 音節になるものがある。V-e 形が 1 音節になる動詞が AVC の V1 として現れる場合、限定詞の挿入ができないという制約があることは Y. -M. Cho (1991)、Cho and Sells (1994)などで指摘されている。この制約は、SVC(25)にも AVC(26-27)にも適用する。[10]

(25) a. cap-a-to cwu-sey-yo. (Y.-M. Cho (1991)、Cho and Sells (1994))
持つ-E-also やる-Hon-Polite
‘持ってもください’

b. *ca-to cwu-sey-yo
寝る-E-also やる-Hon-Polite
‘寝てもください’

c. *hay-nun po-sey-yo
する-Cont 見る-Hon-Polite
‘してはください’

(26) *kkye-nun/man/to an-ass-ta. 김창섭(1981, 54)
抱く-E-Cont/only/also 抱く-Pres-Dec
‘だき-は/だけ/もした’

(27) a. yaksok-ul kka mek-ess-ta.
約束-Acc 剥く-E 食べる-Past-Dec
‘約束をすっかり忘れた’

b. *yaksok-ul kka-to mek-ess-ta.
約束-Acc 剥く-E-also 食べる-Past-Dec

以上の共通点は、形成される部門に違いはあっても AVC と SVC が何らかの共通点を持っていることを示唆している。この共通点に対する説明については和田(2011)を参照されたい。

---

[10] この制約は SVC や AVC 以外の 1 音節 V-e 形には適用されないことに注意。

i) [s ankyeng-ul kkye-to] kyeysok nun-i nappa-ci ess-ta.
メガネ-Acc かける-E-even 続けて目-Nom 悪くなる-Past
‘メガネをかけても目が悪くなり続けた。’

２．４．まとめ

以上の議論をまとめると、(28)の表の様になる。[11]

(28)

部門	語彙部門		統語部門
タイプ	語幹複合動詞	SVC	AVC
生産性	低	高/低	高
透明性	低	高/低	高
隣接性	義務的	義務的	義務的
代用表現	不可	不可	可
とりたて詞の挿入	不可	可	可
V2 の反復(述語分裂)	不可	可	可
活用形	語幹	V-e 形	V-e 形

ここで、語彙的緊密性に関わる現象とされているものが、語彙部門と統語部門の間で截然と線引きができないだけでなく、語彙部門の内部でも、複合動詞のタイプによって異なる点があることが興味深い。AVC と SVC/語幹複合動詞は V1 と V2 の間に、他の語を挿入することができないという点で、いずれも緊密性を示すが、AVC のみが代用表現への置き換えが可能である。一方、とりたて詞の挿入と述語分裂に関しては AVC と SVC が一つの類をなし、語幹複合動詞と区別される。[12]

３．SVC の分析案

２．２節では、語幹複合動詞と同様に、SVC が語彙部門で形成される特徴を示す一方で、V1 と V2 が(ある程度)独立していることを見た。２．３節では統語部門で形成される AVC の特徴を概観し、特徴のいくつかが SVC と共通していることも示した。SVC に関する分析は語幹複合動詞との異同と、AVC との異同を同時に説明できるものでなければならない。

本稿では、次の二つの仮定を立てて議論を行う。1)ある種の小さな統語構造は語彙部門の内部にも現れ得る、2)語彙部門で形成される複合語が、形態的に一つの語にならず、各構成素が、それぞれ統語的に独立した形で

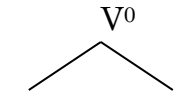
[11] この表は浅尾(2009)を一部参考にした。

[12] 和田(2011)は SVC と語幹複合動詞の共通点は語彙部門という共通点に由来し、SVC と AVC の共通点は活用形と統語構造が共通するということに由来するという議論を行っている。

統語部門に現れる場合がある。いずれの仮定も一般的ではないが、この仮定が、AVC の振る舞いを直接的に説明できることを以下で見てゆくこととする。

上記の仮定に基づき、本稿では、SVC は語彙部門において形態的な一語となることなく、次の様な「小さな」統語構造を取ることを提案する。[13]

(29)



thay-e　　na-

??-E　　出る　=生まれる

以下にこの構造の利点を述べて行くことにする。(29)の構造では SVC の構成素が上位の V^0 に支配されているが、これにより SVC 統語的に一つの動詞として振る舞うことを導ける。また、この構造は 2 節で述べた現象を説明することができる。まず、第一に V1 と V2 の隣接性であるが、V1 にスクランブリングなどの統語規則を適用することは、Lapointe(1979, 8)の定義の語彙的緊密性により排除できる。

第二に、V1 もしくは V2 を代用表現化できないという現象も、代用表現化を統語的な規則とみなすならば、語彙的緊密性により正しく排除することができる。

第三に、語彙的緊密性に従わない様に見える現象も説明することができる。(29)の様な構造をとるならば、V1 と V2 は統語的には独立した語であるため、限定詞が V1 と V2 の間に現れても、なんら問題がない。また、述語分裂を、右端の V^0 を反復する規則であると一般化するならば、複合語全体(上位の V^0)を反復すると複合動詞全体を反復した適格な文が得られ、下位の V^0 を反復するならば V2 のみが反復され、これまた適格な文が得られる。

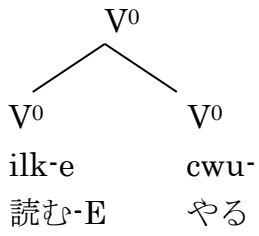
(29)の構造を仮定すると、同時に、AVC との類似性についても説明することができる。K.-Y. Choi (1991)や Sells (1999)は AVC の構造として、次の様な構造を提案している。[14]

---

[13] 統語構造が語彙部門に現れるする分析案は、J.-S. Jun (2007)、이정훈(2006)、Y. Choi (2008)にも見られる。しかし、V1 が VP を構成するとする J.-S. Jun や、V1 が副詞である이정훈と、本稿の主張は異なっている。Y. Choi の分析との相違点については後で触れる。

[14] Sells (1994, 1999)、Iida and Sells (2008)は(30)の様な構造が形成される統語部門を下位句構造(Sub-Phrasal Syntax)と呼んでいる。詳細はこれらの文献に譲る。

(30)



V1 と V2 が隣接していなければならないとする制約が、この構造固有の制約であるとするならば、SVC と AVC が共にこの制約に従うことを説明できる。[15] また、(25-27)で見た、音韻的制約に関する共通点も、特定の部門に適用する制約ではなく、この構造に適用する制約であるとするとより簡素な説明が得られる。

残る問題は、語幹複合動詞と SVC の相違点、即ち、前者があらゆる点において、形態的な一語をなすのに対して、後者がそうではないという点である。Y. Choi (2008)は、SVC に現れる V-e 形が自由形態素であるのに対し、語幹形が拘束形態素であることを、両者の違いに結び付けている。しかし、日本語の連用形は自由形態素であるにも関わらず、連用形を含む、語彙的複合動詞は語幹複合動詞と同様の強い緊密性を示すことを考慮に入れると、自由形態素/拘束形態素以外の他の側面からの説明が必要と思われる。[16]

本稿では、複合動詞の構成素の形態とその形態が現れる環境との関係に注目して論じる。考察に入る前に、韓国語における語の形態的な認可条件について先行研究に触れておこう。Sells (1995)、Cho and Sells (1994)は、韓国語と日本語の補部や修飾部の形態は、それらが結合する姉妹関係の範疇によって形態が規定されているとしている。名詞の投射の姉妹になる要素は、属格、もしくは名詞修飾形をとらなければならない。これ以外の形態は述語の投射と姉妹関係になる要素の形態である。Iida and Sells (2008)は、前者の形態を PRE-N、後者の形態を PRE-V と呼んでいる。統語部門で形成される構造においては PRE-N は述語の投射とは共起せず、PRE-V は名詞の投射とは共起しない。

この分類に従うと、V-e 形は、名詞の投射とは結合せず、述語の投射としか結合しないため、PRE-V の値を持つ形態である。[17] この姉妹関係の語との間の形態的制約が語彙部門でも適用するならば、AVC の V1 の V-e 形は、姉妹関係にある語(V2)が動詞であるため、上記の形態的な条件に従

[15] 但し、この制約を更に一般的な原理から導き出す必要性は依然として残る。
[16] 日本語の複合動詞形式との詳細な対照については浅尾(2009)、和田(2011)を参照。
[17] 主節の最後に現れる形式でもある。

うため、形態論的過程によって形態的な一語とならなくても適格な統語表示を得られる。

V-e 形が語彙部門においても一貫して PRE-V の値を持つことは、次の事実からも支持される。動詞が名詞と結合して複合名詞を形成する場合、V-e が現れることは無く、他の形式が用いられる。[18]

(31) a. *pipi-e pap　　pipi-m pap
　　まぜる-E 飯　　まぜる-Noml 飯
　　ビビンバ
　b. *yel-e soy　　ye-l soy
　　開ける-E 鉄　　開ける-Adnom 鉄
　　鍵

この様に、V-e 形が一貫して動詞としか結合しないのに対し、語幹形は、語幹形は語幹複合動詞の様に、動詞と結合するのみならず、名詞とも結合することから、PRE-V/N の指定を持たないことが分かる。

(32) a. nanwu-s-seym
　　分ける-Link-計算
　　割り算
　b. teph-pap
　　覆う-飯
　　どんぶり

語幹形は、PRE-V/N の値を持たないため、複合動詞を形成する際に、(29)の様な統語構造を取ることができず、複合語化により形態的な一語にならなければならないと考えられる。

以上の様に、語幹複合動詞と SVC の相違点は、動詞の出現に関する形態的な制約によって説明することができる。

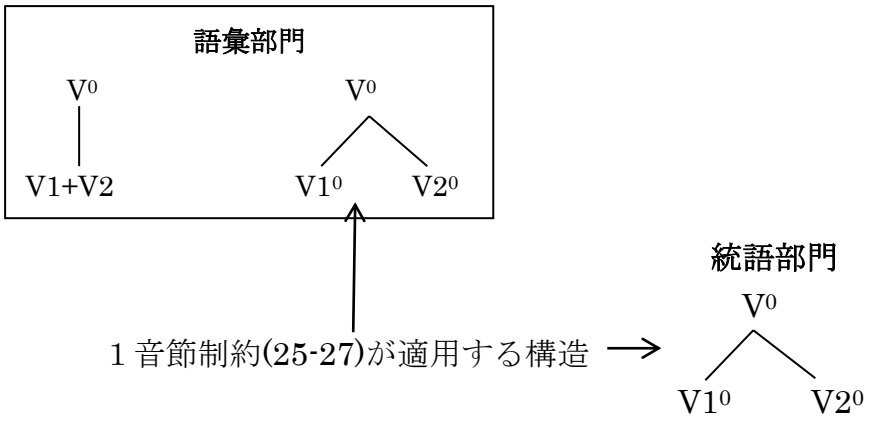
４．まとめ

本稿では、SVC が語彙部門で形成されることを支持する事実を網羅的に挙げ、語幹複合動詞や AVC との異同を整理した。また、統語構造が限定的に語彙部門にも現れること、語彙部門における複合語化が一律に適用するのではなく、ある条件下では複合語の構成素が独立したまま、統語部門に現れるという二つの仮定により、上述の動詞複合表現の諸形式の異同が説明できることを見た。最後にこれらの動詞複合表現の派生仮定を図示しておく。

---

[18] 名詞と結合しないという点で V-e 形と日本語のテ形は類似している。

(33)　語幹複合動詞　　SVC　　AVC



謝辞

本稿の作成にあたって調査に協力して下さった韓国語母語話者各氏に感謝する。また、衣畑智秀氏、佐藤直人氏、江口正氏には貴重なコメントをいただいた。なお、本研究は科研費(課題番号：21520407)の助成をうけたものである

参考文献

淺尾仁彦 2009 動詞連続の文法的性質を捉えなおす-日韓対象を通じて-、関西言語学会ワークショップ「複雑述語の形式・機能とダイナミズム」ハンドアウト

Cho, Young-Mee Yu 1991 "A Phonological Constraint on the Attachment of Particles in Korean, *Harvard Studies in Korean Linguistics* 4, 37-46.

Cho, Young-mee Yu and Peter Sells 1995 "A Lexical Account of Inflectional Suffixes in Korean," *Journal of East Asian Linguistics* 4, 119-174.

Choi, Kiyong 1991 *A Theory of Syntactic X0-Subcategorization*, Ph.D.Dissertation, University of Washington, Seatle.

Choi, Youngju 2004 "Reexamination of Syntactic Approaches to Korean V-e V Compounds," *Harvard Studies in Korean Linguistics*, 10, 386-398.

Chung, Taegoo 1993 *Argument Structure and Serial Verbs in Korean*, Ph.D.Dissertation, University of Texas, Austin.

Di Sciullo, Anna-Maria & Edwin Williams 1987 *On the Definition of*

Word, MIT Press, Massachusetts

Iida, Masayo & Peter Sells 2008 "Mismatches between Morphology and Syntax in Japanese Complex Predicates," *Lingua* 118, 947-968.

Jun, Jong Sup 2007 "Co-Event Conflation for Compound Verbs in Korean," Proceedings of the 21st Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation, 202-209.

影山太郎 1993 『文法と語形成』、ひつじ書房、東京

Kageyama, Taro 1999 "Word Formation," Tsujimura, Natsuko (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, Blackwell, 297-325.

Kang, Sun-Young 1993 "Serial Verb Constructions in Korean and their Implications," Studies in Generative Grammar 3, 79-109.

Kim Byong-Kwon 1993 "The Structure and the Argument-linking Convension of V-V Compounds in Korean," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 5, 180-192.

김창섭 1981 현대한국어의 복합동사 연구, 국어연구 47, 1-98.

김기혁 1995 국어 문법 연구: 형태,통어론, 박이정출판사

김영희 1993 의존 동사 구문의 통사 표상, 국어학 23, 159-190.

Lapointe, Steven 1985 *A Theory of Grammatical Agreement*, Garland, New York.

이정훈 2006 V-어V 합성동사 형성 규칙과 범주통용, 어문학 91, 129-161.

Lee, Youngjoo 2002 "V-Complemenation in Serial Verb Constructions," *CLS(The Main Session)* 38, Chicago Linguistic Society, 409-419.

Selkirk, Elizabeth 1982 *The Syntax of Words*, MIT Press, Cambridge.

Sells, Peter 1994 "Sub-phrasal Syntax in Korean," *Language Research* 30, 351-386.

Sells, Peter 1998 "Structural Relationships Within Complex Predicates,"Byung-Soo Park and James Hye Suk Yoon (eds.) *Selected Papers from the 11th meeting of the International Circle of Korean Linguists.*, ICKL, Seoul, 488-503.

Spencer, Andrew 1991 *Morphological Theory*, Blackwell, Oxford.

塚本秀樹 2004 文法体系における動詞連用形の位置づけ-日本語と韓国語の対照研究-、佐藤滋、堀江薫、中村渉(編) 『対照言語学の新展開』、ひつじ書房、東京、297-317.

Yoon, James Hye-Suk 1995 "Nominal, Verbal, and Cross-Categorial Affixation in Korean," *Journal of East Asian Linguistics* 4,

325-256.
和田学 2010 韓国語のいわゆる軽動詞構文の分類、山口大学文学会志、75-92.
和田学(2011) 二つの語彙的緊密性―韓国語(と日本語)の複合動詞―、山口大学文学会志　61 巻、83-104.

Lexical Compound Verbs in Korean

Manabu WADA

The so-called S(erial) V(erb) C(onstruction) in Korean has been controversial with respect to the locus in which it is formed. Some argue for the syntactic derivation of the SVC, while others for the lexical derivation. In this article, we reinforce the lexical derivation by adding some facts described by Y. Choi (2008), who has observed a set of facts supporting the lexical derivation.

It is well-known that the SVC can be divided by delimiters, which seems to violate some versions of Lexical Integrity. This fact has been taken as a supporting fact for the syntactic derivation.

We account for this fact by paying attention to the inflectional form of V1. The form of V1 has V/SIS value in the sense of Sells (1995), which co-occurs only with verbal projections. Since the sequence of V1-e+V2 is a well-formed syntactic construct, the constituents of the SVC are licensed without fusing into a morphologically single word.